町を育てる

小さくても、可能性は大

氷川町は、総面積33.3平方キロメートルの小さな町です。
このコンパクトな町の中に、
いろいろな農作物がつくれる肥沃な農地、
美しい自然美を見せてくれる渓谷と、
清らかな川、歴史風情を感じさせる町並み、
そして、広い海まであります。
だから、町の未来への可能性は無限。
氷川町のいろいろなところで、
風土や歴史を活かして町を大きく育てる営みが、
毎日進行中です。

いちごが引っ張る氷川町の農業

氷川町の特産品のひとつであるいちご。
多くの品種が安定的に生産されています。

若い後継者がどんどん育っています！

きれいな円錐形で、あっさりした甘さが特徴のさがほのかや、糖度の高いひのしずくなど、氷川町では多品種で質の良いいちごが安定的に作られています。

い草農家から、平成12年頃に転換したという稲田浩夫さん。現在は40aほどの広さの畑でさがほのかを育てています。氷川町ならではの特徴を尋ねると、「実は今、氷川町のいちご農家は若い後継者が多く育っているんです。後継者不足で悩んでいる町が多いなか、氷川町のいちご産業は未来へ繋がる農業と言えるでしょう」と目を輝かせます。また、いちご部会には90名ほど在籍しており、安定した出荷数量を維持できることも重宝されている理由。「いちご栽培は天候に左右されるのが大変ですが、苦労よりも収穫の喜びの方が大きいですね」と話してくれました。

いちご農家　稲田 浩夫さん

町の誇り、
い草を守り、
盛り上げて
いきたい

い草農家
井戸 浩徳さん

ここは日本有数のい草の産地

高級畳の原料として、氷川町のい草は根強い人気を集めています。

氷川町のある八代地域は、日本を代表するい草の産地。かつてい草は町の特産品として盛んに生産されていました。近年、住宅や暮らし方の変化などに伴い畳の需要が減り、以前ほどの生産量はありませんが、それでも外国産に比べて品質の良い氷川のい草は、高級畳の原料として根強い人気を集めています。

この町で代々い草を作り続けている井戸浩徳さんは、「い草は町の誇り」といいます。10年の歳月をかけて育成された新品種ひのみどりは、まるでシルクのようにしなやかな畳表ができると評判で、畳の人気復活にも一役。「みんなで力を合わせて伝統のい草を守りたい」。井戸さんは、『い草の町氷川町』を盛り上げようと意気込んでいます。

冬トマトの生産は日本一

約30軒のトマト農家が美味しいトマトづくりに励んでいます。

トマト農家
藤田 譲治さん

氷川町のトマトは
うまか！と
言われるように、
頑張ってます

トマトといえば夏のイメージが強いですが、実は八代地域は、冬トマトの生産量日本一を誇る地域。氷川町の道の駅「竜北」では、毎年冬トマトの魅力をPRするイベント『やつしろTOMATOフェスタ』が行われています。現在は約30軒のトマト農家が美味しいトマトづくりに励んでいます。

その中の一人である藤田譲治さんは、桃太郎ピース、秀麗(しゅうれい)トマト、りんか409、風林火山など多種類のトマトを育てています。ベテラン農家の藤田さんですが、「何年育てていても毎年難しい」とトマト栽培について教えてくれました。それでも、「町を代表する農作物として、もっとブランド力を高めたい」と力強いメッセージを残してくれました。

梨といえば吉野梨

氷川町の吉野梨は海外でも人気の高い梨のトップブランドです。

他産地と
切磋琢磨して
美味しい梨を
育てています！

氷川町は明治時代から続く梨の産地。吉野梨のブランドは全国的にも広く知られており、天皇陛下に献上されたこともある特産品です。毎年梨部会のメンバーによって、幸水、豊水、秋月、新高などのみずみずしい梨が作られています。吉野梨が一番おいしい時季に行われるのが、秋の風物詩『氷川町梨マラソン大会』。最近では料理に使われたり、デザートなどの加工品も多く作られていてどれも好評とか。吉田昭洋さんは、「梨は氷川町を象徴する果物。県内の他の産地に負けないように、切磋琢磨して、皆さんに喜んでもらえるように頑張っています！」と語ります。

梨農家　吉田 昭洋さん

《TOPICS》

ガンバレ！農業女子

「花を通して地域の人たちと深く関わっていきたい」

農大卒業後に花屋に勤務し、自ら花を育てて販売したいという夢を持った吉村聖子さん。23歳から始めた花き栽培は今年で16年目。花は季節によって変わりますが、カーネーションやユリ、葉ぼたんなど年間7種類ほど。「毎日ハウスにいますが、全く飽きません」と目を輝かせる聖子さん。今後は、子供たちに花や植物と触れ合う楽しさを伝える『花育(はないく)』に力を入れていきたいと笑顔で語ってくれました。

吉村 聖子さん